



アメリカ童話から

19

松原至大

湖へ行つた子うさぎ

子うさぎが、いなくなりました。

お母さんうさぎが、おでかけの時に、子うさぎを、お家の入口のところ待たせて、「ここで待つていらつしやいよ。おいしいクローヴァを、とつてきてあげますから。」といいました。そして大急ぎで、おでかけになつたのでした。

子うさぎは、その時、日光の中にすわつていました。ほかほかとして、うれしいのでした。いつもお母さんが、耳を動かしているのを、見ていたので、自分もブルツ、ブルツと、両方の耳を動かしていました。

そこへ、一ぴきの黒い蜂が飛んできました。

「おはよう、蜂さん。どちらへ？」と子うさぎが聞きました。

「湖へ行くとおすよ。野いちごが、花ざかりですよ。この冬のに、蜜をとつとかなければなりませんから。」と、黒い蜂は答えました。

「いちごの蜜なんか食べてどうするの？」子うさぎが、小さな鼻をピクピク動かしながらたずねました。

「食べるのですよ。」こういつて、蜂はブーンブーン、と音をたてました。ふとつたお腹を、前足の一つでこすりたり、目をグルグルまわしたりしながら。やがて蜂は、とんで行きました。

一羽の駒鳥がきました。

「おはよう、駒鳥さん。どちらへ？」と、子うさぎが聞きました。

「湖へ行くんですよ。あそこには、ふとつたおいしい虫がいますからね。」と、駒鳥が答えました。

「虫をどうするの？」と、子うさぎがたずねました。

「食べるんですよ。」と、駒鳥がいました。一本足で立つて、頭をヒョイヒョイさげながら。やがて飛んで行きました。

一ぴきのねずみ色をした栗鼠がきました。

「おはよう、栗鼠さん。どちらへ？」と、子うさぎが聞きました。

「湖へ行くんです。その大きな木のぼつて、今度どこに実が落ちるのか見るんですよ。」と、栗鼠が答えました。

「木の実を、どうするの？」子うさぎは、いつしよに行きたいなと思いつながら、こうたずねました。

「中の実を食べるんですよ。栗鼠は丈夫そうな白い歯を見せながら、こう答えました。やがて走つて行きました。一ぴきの茶色の亀がきました。

「おはよう、亀さん。どちらへ？」と、子うさぎが聞きました。

「湖へ行くんです。今日は日が照つて、暑いでしょう。だから水の中にはいつてみたいのですよ。」と、亀は答えました。

「水の中にはいつて、なにをするの？」と子うさぎがたずねました。

「泳ぐのですよ。」と、亀はいつてから、できるだけ甲羅の外に、頭と足と尾をつき出して、ゆつくり歩いて行き

ました。

亀が行つてしまうと、子うさぎは、お母さんにいわれたとおりお家の入口のところにすわりました。そばに、はえていたまるい、いくつかの白いデージーが、子うさぎを見て、にこにこしました。子うさぎはあいさつをする。四ひきのお客さまが消えて行つた方を見送つてうなづきました。小さな一つの羽根のような雲が、太陽の上を通りました。そしてそれは、湖をさして急ぐかのように、空を急いで行きました。

子うさぎは、あたりを見まわしました。お母さんの姿は、まだ見えません。

「ぼく、お腹がすいちやつた。ぼくも、湖へ行こうつと。きつといちごの蜜や虫や、木の実があるよ。それからぼくも泳げるんだ。」と、子うさぎはいいました。

子うさぎは、丘をおりて行きました。まるい白いデージーは、頭を振つていました。

高い羊歯のはえてるところにきました。子うさぎよりも、ずつと高いのです。子うさぎは、そのそばに立ちどまつて、とんがつた耳を動かしながら、羊歯をながめました。やがてやわらかな小さい鼻を、その中につつこみました。羊歯は、子うさぎの通れるほどの道を作つてくれました。

間もなく子うさぎは、ひろびろとしたところに出ました。太陽が輝いて、あたりの空気が、よい香りをしていました。

そこへさつきの黒い蜂が、とんできました。

「おや、君もきましたね。ぼくが蜜を集めるのをたすけて下さいよ。君にも、いくらあげますよ。ぼくのするように、花の中に頭をつつこむんですよ。」と、蜂がいました。

でも、子うさぎは、まだまだ小さかつたのですが、その頭は、蜂の頭よりも、ずつとずつと大きくて、ひらつた鼻は、蜜のある花の奥までは、とてもとどかないのでした。

とうとう蜂は、がまんができなくなつて、

「どうしたのだね、いうことをきかない。」「こういつて、飛んで行つてしまいました。一なめの蜜もおかないで。子うさぎは、また丘をおりて行きました。さつきの駒鳥に出会いました。」

「おや、君もきましたね。さあ、虫をつかまえてあげましょう。」「と、駒鳥がいました。

駒鳥は、どこかへ飛んで行つたかと思うと、じきにもどつてきました。まるまるとした一びきの虫を、くちばしにくわえて。それを、子うさぎの前におきました。

「おたべ。」「と、駒鳥がいました。

子うさぎは、虫をながめました。

「だめ。ぼくには食べられない。まだ生きてるんだもの。」「と、子うさぎがいました。

「どうしたのだね、いうことをきかない。」「こういつて、駒鳥は飛んで行きました。

子うさぎは、また丘を降つて行きました。さつきの栗鼠に出会いました。

「おや、君もきましたね。ぼくについて、この木にのぼりなさいよ。実のなるところを教えてあげるから。」「こういつて、栗鼠は木の皮に、鋭いつめをかけて、幹をかけたのぼりました。

子うさぎは、あとから続こうとしましたが、やわらかな足の裏がいたくて、登ることができません。そこへ栗鼠がおりてきました。

「さあ、去年の実を、一つ見つけてきましたよ、かみ割つてごらん。」「と、栗鼠がいました。けれどもかわいそうに、子うさぎの小さな歯では、その実のかたい殻を、かみ割ることはできませんでした。

「どうしたのだね、いうことをきかない。」「とうとう栗鼠も、こうどなりました。そしてその実をとりもどして、木の上に登つて行きました。」

あわれな子うさぎは、また丘を降つて行きました。涼しい風が流れてきました。静かに水のはね返える音が聞こえてきました。ちようど子うさぎの顔の前で、緑の草がとまつていて、その先には、なんだか大きくて、ピカピカ光つた青いものがひろがつていました。

そこへ、さつきの亀があらわれました。

「おや、君もきましたね。さあ、いつしよに湖へ泳ぎに行きましょう。」こういつて、亀は草の中をすべつて行きました。

子うさぎが、足を一つ出すと、ズツズツとその青の中にはいつて行くのでした。

「はいりなさい。亀が呼びました。」

「ぼく、そこは歩けません。草じやないんですもの。」こういつて、子うさぎは、耳を頭にびつたりとつけて、湖の岸のところにしゃがんでしまいました。

「どうしたのだね。いうことをきかない。」こういつて、亀は泳いで行つてしまいました。

子うさぎは、湖の岸にすわりました。

「ぼく、迷い子になつちやつた。」子うさぎは、思はず泣きたくなりました。「こんなところまで、丘をおりてきちやつた。もう、この先は歩けない。ぼく、蜜も食べられなけれや、虫も食べられない。木の実もかめないし、亀さんのように、泳げもしない。どうしたらいいんだらう？」

小さな鼻が、ピクピク動いて、まるい涙が、目の中にたまりました。

その時、だれか来るのに気がつきました。

「まあ、こんなところに。」それは、お母さんの声でした。ああ、子うさぎの喜びようといつたら。

「お母さんは、あなたにお家の入口のところで待つているようにつて、いいませんでしたか？」と、お母さんは

いきました。

「ええ、でもぼく、お腹がすいちやつて、蜂さんと駒鳥さんと栗鼠さんと亀さんが、来るようにつて、いつてくれたものだから。」と、子うさぎはいつて、まだ先を続けました。

「けどだれも、ぼくにクローヴァをちつともくれないし、お家へ帰る道も教えてくれなかつたんですよ。」  
子うさぎの鼻には、涙が流れていました。

「泣くものではありませんよ。お母さんがクローヴァを上げます。もつと大きくなるまでは、ひとりで外へかけてはいけませんつて、お母さんがいつもうでしよう。」と、お母さんうさぎがいました。

「うん、ぼく、湖の上なんか歩けやしない。ぼくたち、どうしてお家へ帰れるの？」子うさぎは、泣きじやくりをしていました。

「あなたは湖の上を歩いてきたんじやありませんよ。丘をまつすぐにおりてきたのです。だから私たち、これから丘をのぼつて行けばよいのです。」と、お母さんは笑いました。

「ああ、そうか。」と、子うさぎは、ぼつとしました。そこで、お母さんうさぎと子うさぎは、ピョンピョンはねながら、丘を登つて行きました。道々、まるくて白いデージーが、二匹におじぎをしていました。子うさぎは、お家へ帰るのが、とてもうれしかつたのです。(ルース・アーノルド・ニケル女史の作による)